

## 〈研究ノート〉

## 火野葦平と北朝鮮 (2)\*

——「北鮮旅日記」翻刻と小説「板門店」「北鮮女性点描」——

李 建 志\*\*

## はじめに

前研究ノートで述べたように、火野は1955年に北朝鮮を旅した。このとき彼が残した日記が「北鮮旅日記」である。前回はこの旅の発端である5月16日（中国瀋陽）から北朝鮮に入国し、さまざまな歓迎を受けるだけでなく、事務レベルの会談を含む北朝鮮の労働者や文学関係者との会談内容について翻刻することができた。今回はその第2弾として、1955年5月21日から22日までの2日間について翻刻する。この時期、火野は板門店を訪れており、これは小説「板門店」に色濃く反映されている。2日間という短い期間ではあるが、北朝鮮の側から日本人作家が板門店を見学するという非常に珍しい場面が展開されており、きわめて重要な仕事であると自負している。以下、21日の朝から見てみよう。なお、この「日記」は北九州市立文学館が保存しているものであり、火野葦平関係文庫を担当している稲田氏の協力のもとで翻刻できたことをここに明記する。また、この研究は私の科学研究費研究課題「大日本帝国と李垠－朝鮮最後の王から見た日韓の比較文化研究」（基盤研究C 課題番号19K00538）の一部であることもあわせて明記したい。

## 1 「北鮮旅日記」翻刻 (2)

欄外上部 ・ 朝鮮国際貿易連進〔促進〕委員会委員長、金教英

平壤5月21日（土）

○朝食後、相談会。今日は泊谷君が起きて来てゐる。板門店旅行は22日朝6時に自働車で5時間、その日の夕方かへつて来るというふプランに変わる。昨日の赤十字社会談の様子を日本へ打電することに決定、英語とラテン語とでなくては打てないとのこと、費用は国家で持つてくれるといふ。日赤、日朝協会、とへ在朝日本人のことを知らせる。

○11時前出発、すぐそばの建物に行く。破壊をまぬがれたわづかな建物の一つ。しかし、むざんに壊されたものをなほ修理中である。金教英さんが出て来て、こんなところに迎へてすまぬといふ。応接室。

○日朝貿易懇談会。先方は主だつた人三人。

○委員長金さんの挨拶。畑中さんこれに答へる。

○金震（貿易連進〔促進〕委員会副委員長）金正樹（同会委員、朝鮮貿易会社々長）通訳、崔福、（同会委員）

○両者の紹介の後、話しあひにうつる。映画カメラマン、専属となつてゐる中央通信社のカメラマン。どこの会に行つても出るビール、サイダー、ビスケット、リンゴ、「平和」タバコ。鳩の絵がついてゐる。

○畑中さん、朝鮮側の貿易基本方針をきく。

欄外下部（ペンギンの印のあるサイダー、麦の穂印のビール）

○委員長の話－基本方向は相手の国柄を問はず平等互惠の精神で貿易したい。南日声明にもとづい

\*キーワード：1995年の北朝鮮、板門店、火野葦平、日記

\*\*関西学院大学社会学部教授

てやる。日朝貿易を [の] 障害はいふまでもなくアメリカ帝国主義である。

○松岡さん-具体的な実行方法について話したいが、どういふ方面から入つたらいいか。(先方、做意 [?] して顔見あはせる)

○金震さん-自分としても貿易は商品と思ふので、商品のことを話したい。わが国として輸出可能のものは、鉱石、植物性産物、水産物、を主として、他の商品も出すことがある。品目一覧表をつくる。

○委員長-生産、教育、建設に必要な資材が要求される。

○副委員長-具体的にいふと、大型変圧機、モーター、ワイヤロープ、電力用ケーブル、測定計器類、織織機、漁具、各種沙 [砂利か]、光学機材、計算機、生活必需品も希望。輸入品をいふと、黒鉛、マグネサイト、螢石、滑石、ケイソキユウ [けい素球]、イリミニウム、重硝石、コーレード、粘土、カーバイト、リンゴ、栗、梨、人蔘、蔬菜類、茸類、水産はメンタイ、メイタイの子、カンテン、ウニ、その他。

○松岡さん-日本としても政治的障害がのぞかれればどの品目も交援貿易かできる状態にあると思ふ。日本では生産あまつてゐるのでむつかしいことはない。ブルドーザ、捲上げ機械、小型機関車貨車などか入つてゐないがどういふわけか。-みんな希望してゐるといふ答。吉岡さん、農機具はどうかときく。一切必要、肥料もいるといふ。しかし、二次的。

○松岡さん-取引の窓口について。貿易連進 [促進] 機関と実務機関か分れてゐる。昨年9月まで、前者がいくつかあつた。それを構成してゐたのは業者、熱心な社会運動家。大資本は商社を参加させ、中小企業分子が入つてゐた。大資本が直接入らなかつたのは、対米貿易の報復をおそれたため。国民の機運が高まつたので、日中貿易連進会が中心となつて統一され、生まれたのが国際貿

易連進 [促進] 協会、社長は村田省蔵 (大阪商船社長)<sup>1)</sup>。それぞれの地方に支局を持ち、地方組織をかためつつある。その大きな事業の一つとして、中国使節団を日本に迎へた。そして日中貿易協定を結び、商品の取引は業者にまかせるといふことになつてゐる。日本政府は社会主義国と貿易することをなかなか許可しないので、通産省の許可をとるためには、貿易連進 [促進] 協会の協力を必要とする。したかつて日朝貿易もこれに準ずるやうに思ふ。

委員長-今後実地に当るに際して、国際貿易会社が当ることになる。わか国では個人の貿易が、全然ないわけではないが、とりたてていふことはないので、会社か当る。その斡旋は連進 [促進] 委員会がやる。

松岡さん-郵送と決済について。為替の取次、実際できないので、バーター制が適当と思ふがいか。

○委員長-原則的には、中央銀行と日本銀行との取引が良いと思ふが、現状はバーター制でよいと思ふ。

松岡さん-従来は中日貿易はホンコンを通じてロンドン決済といふ方法をとつて手を焼いた。将来は両銀行同志 [士] の決済になると思ふか、今はバーター制。

委員長-意見には同意する。

○松岡さん-船は運輸省が北朝鮮を許可しないし、北朝鮮の船が入ることができない。それで、大連港経由といふのはいかが。中日貿易はさうなつた。

委員長-今までは直接船舶往来ができると考へてゐた。東海岸の或る港を指定し、日本の船がそこへ来られるやうに思つてゐた。日本の港にもこちらから行けるやうに簡単に考へてゐた。大連港使用は当局と話しあひたい。

○畑中さん-日本新潟あたりから直接朝鮮の東海岸港と交通することは研究の余地があると思へ

1) 日本の実業家、政治家。明治11(1878)年に東京に生まれ、東京府尋常中学校(現在の都立日比谷高等学校)を経て、明治33(1900)年に高等商業学校(現在の一橋大学)卒。大阪商船に入社し、ブラジル移民の分野で活躍する。昭和9(1934)年に同社社長となり、昭和14(1939)年に貴族員議員に勅撰される。昭和15(1940)年の第2次近衛内閣で通信大臣兼鉄道大臣となり、昭和17(1942)年にフィリピンに派遣され、翌年駐比全権大使となる。敗戦後、戦犯容疑がかけられ、公職追放されるが、昭和26(1951)年に解除された。昭和30(1955)年に日本国際貿易促進協会会長として、主に日中関係の改善に尽力した。昭和32(1957)年に死去。

る。

○委員長-直接やりたいか、李承晩が妨害〔妨害〕するかも知れないので、とくと研究考慮してみたい。

○松岡さん-交渉機関について。使節団を両方から出すこと。朝鮮からでも、日本からでも。(大きなアクビ、牧之内老)

○委員長-今度の予備的会談によつて進設〔進捗〕することを希望してゐる。代表団を交換する段階にしたいと考へてゐるので、朝鮮では国家代表を派遣することができるし、日本から迎へてもいい。一行が努力〔して〕くれて、さら〔に〕運ばれたい。

○畑中さん-趣旨に添ふやう一同努力する。実現性のあることと思ふ。(昨日、赤十字社を訪問した話)日本人引揚げの打合代表とともに、貿易代表、文化代表も来るといふことは実現性がある。

○委員長-その実現をぜひ、さは方〔双方〕で努力いたしたい。

○畑中さん-日本の漁業者の中には北鮮の漁家と共同で仕事したいといふ希望がある。中国との間では漁業協定がすでに結ばれた。漁業家代表が加はることもできる。

○委員長-共同で漁業するのは結構であるが、領海内でも危険がある。海州<sup>2)</sup>附近でも李承晩の船が略奪、海賊行為をやるので、砲撃して追つぱらつたことがある。このため安全保障が憂慮されている。尚、関係当局と接衝〔折衝〕して返答いたしたい。日本の漁業技術は学びたい。李承晩の邪魔について心配してゐる。

○畑中さん-いろいろ障害があつても、実現可能と思ふ。

○委員長-たいへん結構。実現如何は一行帰国後の活動如何によるので、どうぞよろしく願ひたい。今回はこんなみすばらしいところに迎へたが、次にはもつとましなところに迎へできると思ふ。本日の会談は満足であつた。

○2時すこし前辞去。昼食。

欄外上部 (教務部長 尹公益)

○金日成総合大学。(総長はモスクワへ旅行中)

○尹公益さんの話-1946年10月創立。1947年、農民の愛国家運動によつて、本館、図書館、寄宿舎が建つた。労働も愛国的奉仕によつた。別館か二棟あつたか、焼夷でなくなつた。当時、学部が10、農科大学と商科大学、工業大学が分離して単科大学となつた。1949-50年に多くの卒業生を出した。1950年6月25日戦争勃発、全教職員は政治工作に、学生は戦線に出た。このため英雄勲章をうけたもの50%に及ぶ。その後、敵の野蛮的行為で一時後退、1951年からふたたび仕事をはじめた。校舎は破壊されてゐてやむなく一時田舎に疎開してゐたが、その間にも焼夷を数回うけた。そのうち、教職員学生が帰校し、修理しなから、教育をつづけた。この間に、ソ連、中国の援助は大きかつた。1953年の停戦とともに再建にとりかかつた。その後1954年9月、本館復興、うつつてから総本数〔冊数〕、不充分、図書館は約40-50万の本かあつたが、全部なくなつた。今、整備途中。大学の現在、8学部、予備科1、研究院1、講座は約50。余〔り〕見るべきものはないが、将来は外国に劣らぬ大学となる予定。

○大学先生終合〔集合〕、学級紹介。

○学内見学。金日成元帥の部屋、マルクスレーニンの部屋、化学実験室、標本室、-みんな半年後の間に学生が作つたものといふ。

○一枚の珍しい古地図「大東輿地図」1861年に完成された。金正浩といふ人、一人で歩きまはり、白頭山には七回も登つた。地図完成後に、「大東地誌」といふ本をかいた。現在とあまり変らない。その他はよく集められてゐるが、間に合はせぬ。

○教務部長さんの話-①教育の原則は学齢に達した児童を全部学級に入れる。②完全平等の原則、③学校対等の原則④非宗教性の原則。日本帝国主義時代の残滓を整理、アメリカ帝国主義者たちの侵略を防止する建前、人民の自由と幸福、1947年、小学校日帝時代の2倍半、初級中学2倍、高級中学、専門学校が3%、大学は一つもなかつたのがいくつかできた。

欄外上部 1861年製 朝鮮地図 金正浩

2) 北朝鮮西北にある海に面した街。

「大東輿地図」 (古山子校刻)

1949年、人民学校、初級中学、約20倍、他も飛躍的増大した。1849年[1949年か]、約100万の勤労者の子弟、勉強するやうになつた。教育における平等に関する原則が完全に物質的に保証されてゐる。1950年、戦乱勃発、一時中断。1953年停戦後、三年計画にもとづき、教育部門も発展した。各大学は内実において、全機能を發揮できる。本大学は先進文化を導入するとともに、民族的文化をも大切にする。

○大学における外国語の研究について。科学はソ連の先進性に学ぶために、ロシヤ語必要、初級中学からはじめ、高級中学、大学は3年まで行はれる。全体課目の約30%、教師はみんなロシヤ語の原書を耽読し、学生は専門課用のロシヤ語をよむ。実験指導書はロシヤ語でプリント、その他は第二外国語として英語、研究院では英、独、仏、中の四つを定期的に教へてゐる。

○人民学校(小学校)は今五年制だが将来四年制になる。幼稚園を拡充する。○卒業生に失業者はない。足りないくらい。

○学校当局と学生との協力について。教授事業として行はれるが、民主主義者青年同盟、学部民主主義青年同盟委員会、その下に初級団体がある。大学の指導部は青年同盟と密接な連業[連携]をとつ[てゐる]。学部では学部長の指導の下にやる。学部の下には、学生班長が居り、学部長の指示の下にうごく。学生は職業同盟に属してゐる。大学には学生科学研究会があり、各サークルがある。学生から意見があると班長を通じて学部長に申し出る。学部長は定期的に学生幹部と逢ひ、進度会議で学生の意見をきく。批判と自己批判とが広汎にきびしくおこなはれる。学級で討論されて是正される。

○学生数、約3000、(30%女学生)教員約300、(女教師10%)自然科学、物理科学、化学、生物科学、生物、地理、歴史[地理歴史学部か]、経済、語文学、法学部-8学部。他に予備科、南鮮避家族、戦時中に正常にうけれれ[いれられ]なかつた南鮮者、研究院。学生は原則的に収容、学費は一切国家負担、南鮮から李承晩反対して大学に入つた者と、南鮮者の無衣無宅になつた者、ア

メリカから襲殺され無衣無宅になつた者は特別待遇。研究院(日本の大学院)の学生は一切の研究費を国家から出す。三ヶ年。大学は現在四年だが、将来はみんな五年になる。

○先方から日本の事情をきき、鈴木さん、泊谷君など各々、熱心に話あつて長くなる。最後に、富永さんのメツセージを李鳳溪さんが読んでおしまひにする。8時近くなつた。

○夕食は、翌朝が早いので早く寝る。

欄外上部(開城 板門店)5月22日(日)

○朝は、五時皆起きる。朝食にシジミ汁が出た。おいしい。すこし腹工合がわるくて下痢気味。春菠嬢から菓をもらふ。

[頁変わって、下段に走り書き]

○12時40分、出迎への停戦委員会儀礼部長申相哲中佐、案内されて開城に入る。

○左手に立つてゐる花崗岩「社稷町薪炭市場」

○栗の花畑、よくのびてゐる麦。開城駅から列車が出るところ。平壤行であらう。これまでいく度もレールを横切つたが汽車の走るのに出あはなかつた。一日一回か二回か。さんたんたる戦禍のあと、わづかに残つてゐる建物、レンガにあいた機銃のあと。

○開城 廢墟か復興してゐないのでまだ街の形を備へてゐない。[一行抹消] 兵隊の姿が多い。女兵も見れる。看護婦か技術兵かであらう。川にかかつて橋に「都橋」とあり、サツポロビールの天幕の張つてある瓦礫の家がある。戦禍かひどいが、昔風の屋根の反つた古い家もだいぶん残つてゐる。さすがに兵隊たちの姿多く眼につく。中国人民志願軍の兵隊たち。いづれも子供のやうに若い。ぐるぐる廻つて町はづれに車行く。開城は特別市。

○一軒の家 もと地主の別荘は、純朝鮮風建物、松林の中を抜けて行くと、すばらしい藤棚と菜の花。あざやかな楓。橋の門を入ると、庭にちやんと金ダラヒに水、タオルが用意してある。ホコリにまみれた。この家が第一次停戦会議がおこなはれた家。昼食の準備がしてある。柱に彫りつけてある文字「自得心中趣」「誰論世上名」「清風雨窓

升」「明月一池蓮」「升影分横場」など。典雅。

○若い中将来る。ベタ金の肩章。李相朝<sup>3)</sup>將軍（停戦委員会主席代表、朝鮮人民軍および中国人民志願軍主席代表）41才とのこと。（金日成元帥は44歳、日本流にかぞへると43才）鄭国録少將、盧仁熙<sup>4)</sup>総大佐（肩章の星四 ☆☆☆）など。盧大佐は日本で労働運動をし牢屋に入れられたことあるとかで、通訳をするみんなとのやはらかなが、闘争できたへられた人たち。食卓にはサシミ、その他の御馳走。

○デリーで逢った浅岡君の話を思ひだす。1950年6月25日、勃発した朝鮮戦争はなほ謎につつまれてゐる。十一時から北鮮軍が南へ侵入したと思つてゐる者は多いし、浅岡君はそれを断定してゐた。彼は新聞記者としてすべての情報を総合し、また朝鮮戦線へ従軍もしたので、その言葉は確信にあふれてゐた。自分がさうのやうにこれまででは考へてゐた。北鮮に来ると、南から侵入したとみないふ。こちらの話はよくきいておき、かへつてからもつとよく研究してみよう。しかし、歴史がつくれる過程での謎については深く考へさせられる。南鮮に君臨してゐるアメリカへの憤りはここに来て深くつた。

#### 欄外上部

李相朝－朝鮮軍事停戦委員会朝鮮人民軍及中国人民志願軍側主席委員  
（正式の呼称）－朝鮮停戦談判朝鮮人民軍及中国人民志願軍代表団主席代表 大将 南日

○李將軍の話－談判開始してはじめてアメリカ人を見た。当然理にかなつことは反対しないだらうと思つた。しかし、そうではないといふことがわかつた。例へば分解線をきめるとき、両者で分科委員会を作つた。李將軍参加、第8軍ホーデス少將軍が、三十八線できめようと提案した、はじまつたのも三八線マリク〔ソ連代表〕提唱したのも38線、こつちか南を占領し、向ふか北を占領してゐるところとある。三八線妥当と定つたのに、

アメリカは平壤付近に線を引いてそこにしようとした。びつくりした。分科委員会は次の部屋でくつろかうと、ビールサイターを出し、ソファをおいて、別室でした。あまりおどろいたので、正式かときくと、「さうだ」「そんならその理由をきかせてもらひたい」「今の軍事状況は真の軍事力を表現したものではない、海に強大な海軍があり、大空軍がある。それを考慮に入れて平壤附近が妥当」しかし、真の軍事力は地上で対峙してゐる状態と思ふ。アメリカのやうにいへば、われわれを支持する友達（中国、ソ連）を考へれば、こちらは釜山でしたいくらゐだ。

#### 欄外上部

李將軍「平壤と広島と破壊の状況はいかがですか」畑中「それは広島の方がひどいでせうね」「原子爆弾だからさうかも知れませんね」「しかし、広島について、平壤のひどさにもおどろきました」

○この開場をアメリカかどうしてもくれといふ。もし京城で戦争がおこると、アメリカは不便といふ理由、この勝手な不合理を反対した。戦争で得られなかつたものを談判で得ようとは勝手すぎる。これはこつちのいふとはりになつた。

○捕虜問題－自分も参加、アメリカ、リビー（付帯？）一人一人を交換しようといつた。後退しなくてはならぬときに、敵にふかまつた者は多かつた。アメリカ兵もこちらで捕虜にした。捕虜を後待〔厚待か〕した。南鮮兵は同胞であるから、教育して、自己の意志にしたかつて解放した。談判のときには実動か少なかつたので、一人一人を主張した。一人殺せば一人殺し、一人捕へれば一人捕へるといふやうなことが戦史にあり得ない。実情と一致しないので、不合理、なに故戦争が終つたときなぜ捕虜を残すのか、ドレイにするのか、売するのか、人道主義をすぐ口にするが、それに反してゐるではないか。ジュネーヴの主張と変へてゐるではないか。118条によると戦争すんだあ

3) 李相朝（1913-1998年）朝鮮慶尚南道東萊（現・韓国釜山市東萊区）で生まれるが、父が奉天で事業をしていたため満州に渡り、中国の中山大學を卒業した。抗日運動に参加し、朝鮮義勇軍を指揮したといわれる。

4) 鄭国録と盧仁熙についてはよくわからなかつたが、1956年に中国慰問団を鄭国録少將が接遇したことが『RP ニュース』（ラヂオプレス通信社）1956年3月号に載っており、間違いなく彼は少將の地位にあったといえる。

と、すみやかに捕虜をかへすとかいてある。捕虜問題が重大であり論争の中心であつたが、アメリカが調印しなかつた理由は別にあつた。

欄外上部

「自分は純〔文学〕作家でも外交家でも経済家でもなく純然たる軍人です」といく度もいふ李將軍。

アメリカ国内では、戦争持続と反対の二つの流れがあつた。反ソ反共の包囲戦をつくらねばならぬので、共産国をたたいてゐることを説明する要があつた。英仏と連絡ををうしなはぬための理由が考へられる。アメリカ国内で、戦争へ人民をかりたてねばならぬし、戦時産業に切りかへるために、武器を売らねばならぬためにも、停戦に調印しにくかつた。(牧之内さん、日本の資本家もさうです、といふ) このためアメリカが長びかせ

た。アメリカ人にいつた。軍事的だけでは解決できない。政治的な点大切。アメリカ国内で、トルーマンとアイゼンハワーとの大統領選挙問題がおこり、両方が停戦を売り物にした。アメリカ国内の輿論を反映したものだ。そこで三八線を境に停戦を獲得した。金日成將軍の指導と雄勇〔勇敢か〕な人民の力がうしろだて。

○敵か談判を破壊するつもりなら、こちらかどんなにを正当にやつてもダメだが、それは世界の輿論がゆるさない。ハリソンが来たとき、席を蹴った。退場しなくてもいいではないかといつた。虚勢なので、またやつて来た。

われわれはクリスチヤンではないから、左の頬たたかれれば右の頬を出すといふことはしない。頬を一つたたかれれば一つなぐりかへす。信念があるからゴロツキのやうなオドカシには乗らない。

○調印後の国難がある。二つの機構、一つは軍事停戦委員会、中立監視委員会。これは停戦協定を

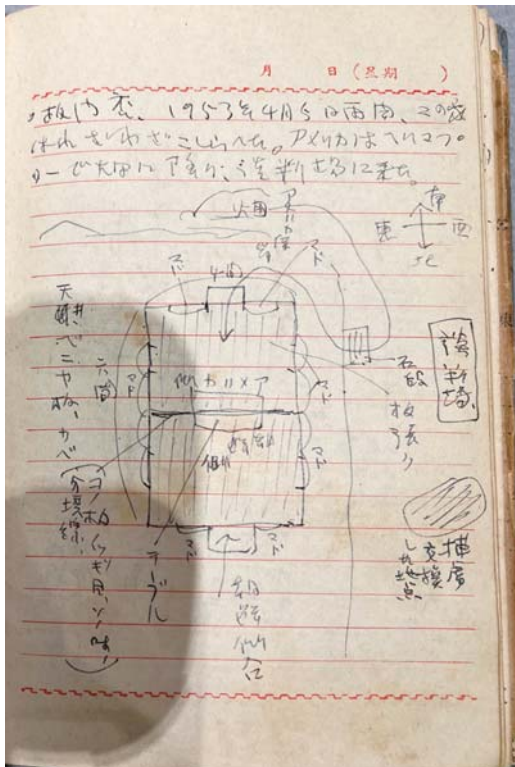


写真 1

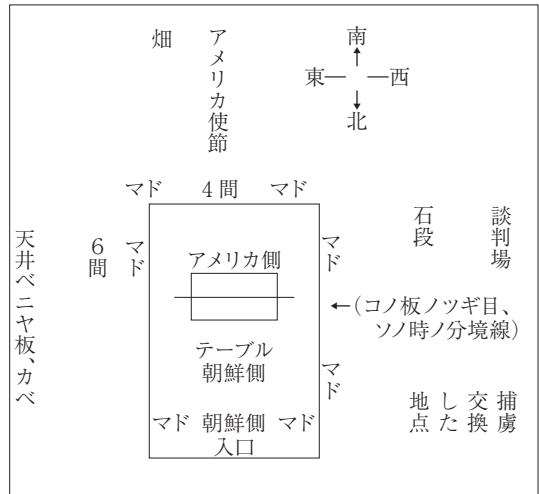


図 1

5) ウィリアム・K・ハリソン・Jr (William Kelly Harrison Jr. 1895-1987年) 米国陸軍中将で、停戦協定の連合国軍代表。



ささうに握手。

○李將軍「自分は最後の勝利について確信を失ったことはありません。南鮮統一は時間の問題です。」

○板門店に行くことになり、辞去。美しい藤の花。町の中央にロータリーみたいになつてゐる門の蹟 [跡]、大きな釣鐘が一つ、ぽつんとおいてある。門は焼けたらしい。車はしだいに町の外に出る。木のない低い高地の連続、どの丘にもこのつてゐる散兵壕のあと、激戦がしのばれた。耕地はよくたがやされ、麦がそよぎ、大根葉、ネギの花、菜の花が美しい。踏切桿 [棹] のおろしてあるところで車とまる。ここから非武装地帯 (幅四キロ)、鉄条網が張つてある。車に黄色い旗をつける。「向ふに知らせる」といふ。電話。三時四〇分、フミキリがあげられて通過。左手に兵舎トラック。

○板門店、1953年4月5日再開、この家はわざわざこしらへた。アメリカはヘリコプターで大な

に [大げさにか] 降りて談判場に来た。

[次頁欄外上部]

○すぐ足もとから南朝鮮がつづひてゐる。黄色い花の咲いてゐる土手、胸につけたいと思つても取りに行くことはできない。チュツチュツ、雀、向ふにとんで行つた。アメ公、チラと見たが表情もかへぬ。行き来するスズメ。ウサギ、モグラはいいが人間だけいけないのである。雲往来。

### 2 小結

以上のように、火野葦平は板門店を訪れている。すでに述べたように、この日のことは小説「板門店」(『赤い国の旅人』所収)で詳しく述べられているが、不思議なことに帰り道の記載が、「北鮮日記」にはない。遠出をして、よほど疲れたのか、あるいは感想を書くことを控えるようにいわれたのか、わからない。下線の引いてある場所は、小説でも活かされている。この2日間のう

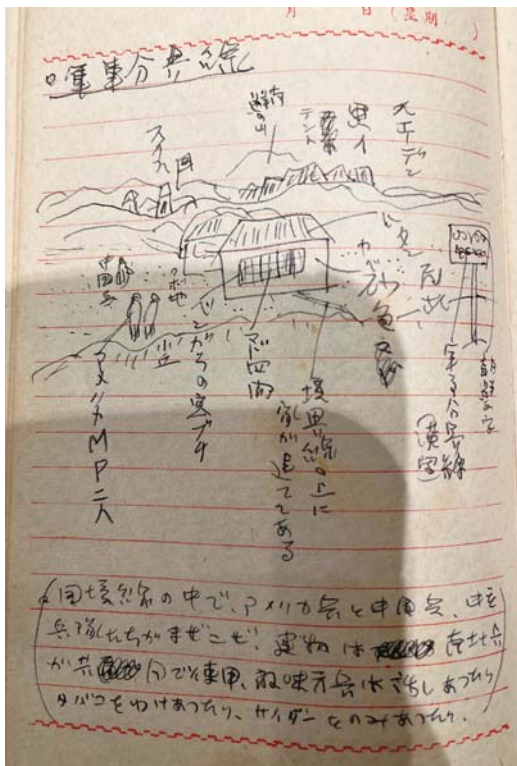


写真3

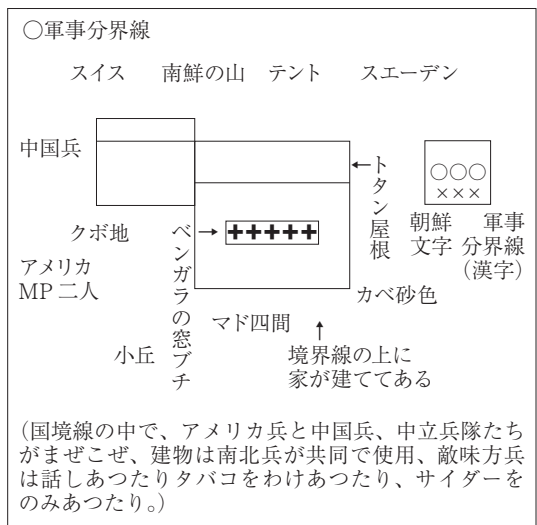


図3



ち、とくに5月22日の板門店訪問が一編の小説になっているということは、それだけ感慨深い訪問だったからに違いない。

今回はこの2日間の記載を翻刻するところでおわりとする。5月23日から26日までの4日間で、さらに火野たちは知識人に会ったり、そして地方公演をしていた崔承姫チェ・スンヒが平壤に飛んで帰ってきてひと踊りするなどの事実が述べられている。そのときの崔承喜との邂逅は、「北鮮女性点描」

でも取りあげられている。また実は、この小説「板門店」でも案内役に女性が立てられており、その女性の悲惨な過去も、小説内ではかなり詳しく述べられている。もうわかるとおり、火野にとって朝鮮は「女」の国であったわけだ。わかりやすいオリエンタリズムあるいは火野の男性本位主義を断ぜざるを得ないが、その小説に関する議論は、次回で翻刻をすべて終えたあと、あらためて論じようとする。

Ashihei HINO in North Korea (2):  
Reprinting Ashihei HINO's Diary in North Korea and  
his story, "Panmunjum" and "Personal Reports  
of Women in North Korea"

Kenji LEE

**ABSTRACT**

In May 1955, Ashihei HINO visited North Korea. Imagining what he experienced at that time, I, therefore, want to reprint his diary, Hokusen Tabinikki. In Imperial Japanese, hokusen, when translated, means "North Korea," and I want to report that his experience appeared in his story, "Panmunjum" and "Personal Reports of Women in North Korea." However, his diary is voluminous, and handwritten letters are difficult to read and comprehend. Therefore, I intend to reprint it on three papers. Although, I already reprinted "Ashihei HINO in North Korea (1)" from May 16 to 20, 1955. In this article, I intend to reprint the next two days, which are from May 21 to 22, 1955, titled "Ashihei HINO in North Korea (2)." This article describes only two days, which are crucial for Ashihei HINO because he wrote a story, titled "Panmunjum" based on his experience. Nevertheless, I will reprint from May 23 to 27, 1955, as "Ashihei HINO in North Korea (3)" in the next journal.

**Key Words:** North Korea in 1955, Panmunjun, Ashihei HINO, Diary